論　　文

吹奏楽の発達と学校における指導

畠澤　郎・福森　利昭

1. はじめに

わが国の学校教育に欧米音楽のシステムが導入されてから140年余り過ぎたが，この間の音楽教育はめざましい発展を遂げた。今日ではクラシック音楽に限らずポピュラー音楽の分野においても世界的に活躍する音楽家が多数輩出されている。

また音楽愛好者の嗜好するジャンルは年々多様化が進み，分類が困難なほど複雑であるが，そのような中で吹奏楽による音楽は「ブラバン」の呼称のもとに，わが国では以前から老若男女を問わず一般人に親しまれてきた。この動因について遡ってみると，欧米音楽の移入とともに軍楽隊が設けられて国民が常に耳にしてきたこと，また戦後は教育現場に吹奏楽が部活動として採り入れられたこと，そして地域社会の行事ではそれによる音楽に触れる機会が多いこと等が考えられる。

本論では，今日における吹奏楽の状況，また欧米諸国における吹奏楽発達やわが国における進展の経緯について史的に概観するとともに，学校現場におけるその指導のあり方について論を進めるものである。

2. わが国の吹奏楽

わが国の吹奏楽は第二次大戦までは軍楽隊が中心であり，民間の組織は主に都会や一部の地方都市の活動に限られていた。

戦後，軍隊の解体にともなって軍楽隊関係者が各地で吹奏楽の指導者や推進者として地道な運動を展開し，今日のような全国的な規模の組織を築いてきた。しかもその土壌となったのは，器楽教育が導入された戦後の学校教育によって技能や感性が磨かれた青少年達の取り組みだったのである。

戦後の学校音楽に器楽が学習領域として採り入れられたことは，児童・生徒の音楽に対する

キーワード：軍楽隊，吹奏楽，学校の部活動

関心や意欲を高めさせ，楽器の愛好者を増やすとともに器楽教育を前進させることになった[1]。加えて，戦後の経済復興も吹奏楽の発展に大きな影響を与えた。特に昭和30年代以降の高度経済成長と，技術革新による楽器の改良をなくしては今日のような吹奏楽の進展は見ることができなかったであろう。

敗戦直後からしばらくの間の国産楽器は扱い難いものであった。クラリネット等の木管楽器は安価なエボナイト製のものがあったり金管楽器は重かったり等の材質の問題に加え，音程が悪いことから，奏法の工夫等表現上の苦労があった。

しかし，そのような楽器であっても当時の青少年は器楽合奏，すなわち吹奏楽に対するあこがれやそれに取り組もうとする思いが強かったのである。

現在，吹奏楽に親しむ青少年が手にする楽器は，戦後の技術革新による材質の開発や音程の調整がスムーズに操作できるもの等，画期的な改良が加えられている。また，戦後の経済成長途上期の頃には高価で手に入れることが不可能だった世界の一流メーカー製の舶来品も，高度経済成長に伴う国民生活の向上によって，いとも容易く手に入れることができるようになった。そのような楽器を児童・生徒たちが個人持ちの楽器として何時でも練習に取り組めるようになったことが表現技能を飛躍的に高めることになった。このような豊かさに加え，国内外における種々のコンクールやコンテストが開催されるようになったことが更なる吹奏楽全体のレヴェルを引き上げることになったといえよう。

現代における吹奏楽は，単なる行進やイヴェントを盛り上げるための役割を越え，ビューグル・バンド[2]やトランペット鼓隊，またステージ演奏のコンサート・バンド等，多岐に亘る演奏形態とともに，芸術としての音楽表現を追求するバンドとして発展し続けている。

そして，これらのバンドで演奏技術を磨いた団員の中にはプロの世界に転身し，クラシックやジャズ等の分野で活躍するミュージシャンが数多く輩出されている。

吹奏楽が青少年の心を虜にし，あこがれの楽器に取り組ませる魅力はわが国に限らず他の国々においても同様なことだと思われるが，その発祥や欧米諸国における発展やわが国へはどのような経緯で導入され，どのような指導のもとに現在のような発展が見られるようになったのか，ということについて探ってみる必要があろう。

3. 欧米における吹奏楽の発達

吹奏楽はヨーロッパとアメリカにおいて軍隊とともに発達した。ここでは欧州諸国と米国の吹奏楽の発達過程を概観する。

---

[1] 木村信之　昭和戦後音楽教育史　音楽之友社　1993年　68～69頁参照

[2] ビューグルは，信号喇叭として軍隊で使われた。ピストン・ビューグルとノーピストンビューグルの2種類がある。

ヨーロッパにおける吹奏楽の歴史は古く各国とも軍隊とともに発達してきた。すなわち，城の見張り塔に楽手を配して命令を伝えたり戦いの場で兵士の士気を鼓舞したりするために管楽器による音の合図が使われていたと伝えられている。

合奏の形で演奏され始めた時代については諸説があるが，古いバンドとして知られているのは，16世紀中頃にドイツとオーストリアに普及したタウンバンドであろう。そこではコルネット，トランペット，サクバット（トロンボーン）等の金管楽器によるコラールや祝祭典の儀式音楽を演奏していた。ヴェネツィア楽派のジョバンニ・ガブリエリ等がこの種の合奏のための作曲をしている。

またフランスでは，17世紀後半にルイ14世が自分の軍隊にオーボエバンドを設置している。これは，ソプラノからバスに至る4種のオーボエとドラムから成っており，この編成はヨーロッパ各国の軍楽隊に採用された。ルイ14世は，このバンドのために作曲家リュリを雇い入れて多くの作品を書かせたと言われている。

フランスの吹奏楽発展に大きな影響を与えたのは，1789年に勃発したフランス革命であった。当時の音楽家サレーテは，作曲家のゴセックを楽長に任命するとともに国民軍楽隊を編成した。このバンドは，1790年にはパリ市当局の維持で70名の大規模編成のバンドとなった。1792年には経済的な理由で解散の憂き目にあったが，サレーテの努力により，これを母体とした「パリ国民軍自由音楽学校」が設立された。さらに1795年には今日では有名な「パリ音楽院」創設へと発展していくことになる[3]。

この時代には，ゴセックやケルビーニなどの作曲家達によってコンサート・バンドのための序曲や行進曲等，多くのオリジナル作品が誕生している。この頃からバンドの近代化が急速に進むことになった。このフランスの影響は近隣の他国に波及し，イギリスやドイツのバンドも次第に大きくなっていった。

イギリスでは19世紀中頃に吹奏楽運動が盛んになった。各地で開催された軍楽隊の演奏会が民間人に刺激を与え，労働者の間でバンド結成の機運が高まった。この頃にコルネットが改良されたことから，金管楽器のみの形態による演奏が合奏の中心となった。1833年にはウォーカー・アンド・ハードマンスという金管によるバンドが結成された以後は，同様な民間のバンドが続々と誕生した。このように，イギリスでは金管楽器を中心とした吹奏楽，つまりブラス・バンドが発達した。

ドイツには軍楽を専門に教育する学校はなかったが，1874年にベルリン高等音楽院に軍楽科が設置されて指導が行われた。第一次世界大戦後には縮小されることになったものの，ナチス時代には大隊，連隊の改組等にともなう改善がなされ，そこで教育を受けた軍楽隊がベルリンの防衛連隊所属としてドイツ陸軍の最大バンドとなった。また1935年には空軍軍楽隊も編成さ

---

[3] 最新吹奏楽講座７　吹奏楽の編成と歴史　音楽之友社　1970年　42～43頁参照

れている。

このように，ヨーロッパ諸国における吹奏楽は軍楽の形で19世紀末までに一大発展を遂げた。

一方，アメリカではギルモアとスーザに代表される職業吹奏楽団によって基礎が築かれた。また，学校における器楽教育としてのスクール・バンドの普及が吹奏楽の進展に大きな役割を果たしてきた[4]。

ギルモアは，マサチューセッツの第24連隊軍楽隊長として南北戦争に出征したが，1862年に戦線から戻ってからは近代的な楽器編成のバンドを編成し，国民の心を癒すとともにモラル向上のためにアメリカ国内各地やカナダ等へ演奏公演をしたことが知られており，1878にはヨーロッパ各地へも演奏旅行をすることによって名を馳せた。彼のバンドは，木管楽器を中心とした当時としてはユニークなもので100名にも及ぶ大規模な編成になることもあった。その編成形態は今日のコンサート・バンドの規範となっている。

また，行進曲の王として知られるスーザは，1880年に大統領付海兵隊軍楽隊長に任命されたが，その職を辞任した1892年にはボストンでスーザ・バンドを設立した。その編成はギルモアの方式を踏襲した木管楽器を中心としたコンサート・バンドである。

また，アメリカの吹奏楽について，各国の吹奏楽教育関係者から注目されてきたのがスクール・バンドである。アメリカの学校では吹奏楽が正科目として音楽教育の一部に取り入れられており，その教育は量的にも質的にも世界最大といわれている。生徒達は下校後や休日でも個人指導を受けることができる教育システムであり，アメリカの吹奏楽発展に大きな貢献を果たしてきている[5]。

以上，欧米における吹奏楽の歴史を概観したが，わが国においてはどのような経緯のもとに発展してきたのであろうか。

4.　わが国における吹奏楽の発達

(1) 洋楽の移入と軍楽隊

わが国における吹奏楽は欧米諸国と同様に軍楽隊によって始まった。その契機は徳川幕府の威勢が衰えた幕府末期における黒船ペリーを象徴とする開港貿易を迫る欧米列強の度々の来航に対して，幕府や諸藩は軍備の拡充のため兵制を改める必要に迫られた。すなわち洋式の兵制であり，その当初はオランダ式を採り入れたのであった。薩摩，長州などの藩では，武士の士気高揚のために用いていた法螺貝や陣鐘，陣太鼓等から歩調を統一する音楽が必要として洋式

[4] 同上参照

[5] 最新吹奏楽講座７　（前掲書）　1970年　42～43頁参照

の軍楽を採用する動きがあった。

軍楽の取り組みに最も早かったのは薩摩藩であり，維新直後の明治2年には欧風の軍楽を採り入れたことで知られている。藩主の島津久光は，藩兵の中から洋楽に興味・関心を持ち，情熱のある若い侍30余名を横浜の妙香寺に派遣して，イギリス公使館付軍楽隊長のジョン・ウィリアム・フェントン指導下に軍楽の伝習をさせたことが記録として残っている[6]。そして伝習生のための楽器はロンドンのベッソン社に発注したのであった。その楽器は，ピッコロ１，クラリネット９，バスクラリネット１，コルネット４，トランペット１，ホルン４，アルトホルン２，テナートロンボーン２，ユーフォニューム１，バス２，小太鼓１，大太鼓１の計29であり，これらが届いたのは翌3年の6月であった[7]。

これらの楽器が届いてからは，フェントンは昼夜4回も妙香寺に足を運んで訓練をするという熱の入れようであった。伝習生達が指導を受けた楽曲は，「日本禮式」（フェントン作曲の“君が代”），「英国行進譜」（後に“維新マーチ”と改題），「徐行進譜」等などであった[8]。

軍楽隊は，明治4年に兵部省の所管となったものの翌5年には兵部省が廃され，新たに陸軍と海軍両省が新設されたことから，軍楽隊も陸軍と海軍に分けられることになった。海軍はイギリス式兵制を採用していたことから海軍軍楽隊は引き続いてフェントンに指導を受けた。また，陸軍はフランス式兵制を採ったことから軍楽隊もフランス式を採ることになり，その指導はフランス陸軍4等楽手喇叭伍長のダクロンによって行われた[9]。

海軍軍楽教師のフェントンは，明治10年の西南戦争直前にはその職を辞してイギリスに帰国した。その後，明治12年には後任としてドイツ人のフランツ・エッケルトを海軍軍楽の教師に迎えられたが，彼は明治21年3月に宮内省式部職の音楽教師に転じたため，その後任として同年7月にグスタフ・アルプを迎え入れ，25年4月まで指導を受けた。後にエッケルトが宮内省との兼務で30年3月に再び海軍の軍楽教師として招聘されている[10]。

このように，わが国の黎明期における吹奏楽は，お雇い外国人教師による指導であったが，芸術としての音楽教育とは言えず軍隊の士気鼓舞のためにやむにやまれぬ事情によって軍楽から始まったのであった[11]。

---

[6] 上原一馬 日本音楽教育文化史　音楽之友社　1988年　274頁参照

[7] 山口常光　陸軍軍楽隊史　三青社　1973年　22～23頁，及び，三浦俊三郎　本邦洋楽変遷史　大空社（復刻版）1991年　75～77頁には各楽器の担当者名があるが，楽器の呼称に違いが見られる。

[8] 日本音楽教育史（前掲書）　274頁参照

[9] 野村光一　お雇い外国人⑩音楽　鹿島研究所　1971年　34頁　陸軍は明治11年の兵制改革でフランス式からドイツ式に変わったが，軍楽隊はフランス式のまま残った。

[10] 日本音楽教育文化史（前掲書）　276～278頁参照

[11] お雇い外国人⑩音楽（前掲書）　12～14頁参照

(2) 公園演奏会

西洋音楽に関した演奏会は，明治20年頃までは陸海軍の軍楽隊，または音楽取調掛と宮内省雅楽部伶人によるものがほとんどであったが，吹奏楽による演奏会は第二次世界大戦が終わるまでは主に軍楽隊を中心としたものであった。明治14年の夏，横浜の山手公園に西洋式の音楽堂が建てられ，外人クラブの要請で陸軍軍楽隊が指導者ダクロンとともに出張演奏をしたのが，日本人による初めての公園演奏会であったといわれている[12]。

公園演奏は，当時の吹奏楽とは切り離せないもので欧米諸国の各都市には必ずといってもよいほど吹奏楽のための音楽堂が設けられている。わが国では，日比谷公園音楽堂における演奏会がよく知られているが，その第1回演奏会は日露戦争時の明治38年8月に開催された。その発案は当時の東京市長の尾崎行雄で，市民に洋楽への興味と関心を持ってもらおうという目的であったといわれる。当日の演奏に先立って，尾崎市長は挨拶で『品性修養に資する高尚な音楽を市民におくるものである』と述べた。続いて永井建子の指揮で陸軍軍楽隊員50名によって演奏された。演奏曲目は，永井作の行進曲をはじめとして10曲が記録されている。また，第2回の公園演奏は，吉本光蔵の指揮による海軍軍隊の演奏であった[13]。

軍楽隊による公園演奏会は，当時の民間人に音楽の視野を広げさせるとともに，洋楽に取り組もうとする青少年にも大きな刺激を与えたことはいうまでもない。この日比谷公園音楽堂は，大正12年の関東大震災後には改築され，新たに大音楽堂として公園南隅に設けられた。

第二次大戦終結とともに軍楽隊は解散することになったが，この公園演奏会は戦後も警視庁音楽隊が水曜コンサートとして，また東京消防庁も金曜コンサートと称して続けられた[14]。この演奏会は，大戦後の殺伐とした雰囲気を緩和し，聴衆の心に安らぎと癒しを与える役割を果たした。他に，大阪市の天王寺公園や名古屋市の鶴舞公園でも行われたようであるが，定期的なコンサートの記録は残っていない。

(3) 民間音楽隊

軍楽隊が醸し出す壮大で優美な演奏は，その珍しさもあり青少年や民間人の吹奏楽に対する興味や関心を高め，明治20年代頃から30年代にかけて民間の音楽隊が出現する。

民間人による吹奏楽は，軍楽隊出身の楽士が指導者として東京や大阪に組織されたことに始まるが，当時は日清戦争後の戦勝景気にあやかった商業広告業者の音楽需要があり，職業的なものからアマチュア同好会的なものまで含めて地方都市においても急激に音楽隊が増えた。中でも明治27年7月に結成された東京市中音楽隊はよく知られている[15]。この音楽隊の隊員は，そ

---

[12] 最新吹奏楽講座７（前掲書）　113頁参照
[13] 本邦洋楽変遷史（前掲書）　372～375頁参照
[14] 最新吹奏楽講座７（前掲書）　175～179頁，及び185～187頁参照
[15] 本邦洋楽変遷史（前掲書）　350～352頁参照

の過半数が軍楽隊出身者で占められた私設職業団体として活躍した。他には友楽会，東京音楽隊，長幼音楽隊，日本橋幼年音楽隊等が相次いで設立されている。

一方，大阪でも大日本楽隊，大阪音楽会，浪波音楽会，関西鼓勇会等が設立され，盛んに鼓吹した。また，地方都市においても音楽隊が組織され，函館，神戸，仙台，博多等では催しや商業宣伝などに使われていたようである。中でも貿易港として西洋文化の受け入れ先進都市であった函館では，明治27年に早くも函館音楽隊が結成された。この函館音楽隊には他では見られないユニークな賛助会員制度があった。その規約では定員が100人，各人の一時金を2円としてその後に５ヶ月の間50銭ずつ納入した場合には3年間にわたって開閉店の儀式や婚礼，葬式等には無報酬で出演するとともに，楽隊が主催する音楽会には家族ともども招待する，というものであった。

北海道では，函館音楽隊の他に明治30年代から40年代にかけて続々と音楽隊が誕生し，道内各地で活動していたことが記録されている[16]。それによれば明治32年頃には小樽の音楽隊，さらに室蘭の音楽隊が結成されている。このような市中音楽隊と前後して企業の音楽隊も組織されるようになった。札幌の丸井デパートの楽隊は，専門の楽士から教わって自店の行事や売り出しの宣伝の他，官庁からも行事等でよく依頼されて演奏し，十二分な宣伝効果を発揮しながら大正年代まで活動を続けた。また，室蘭支店の音楽隊は，日露戦争時の室蘭港からの出征や凱旋をする旭川第七師団兵士の歓送迎のために連日のように活躍した。

日清・日露戦争から第二次世界大戦までの戦時下においては，国防国家建設という国策により，国民の生産性を高める士気高揚とともに生活に潤いと温かさをもたせる慰安の必要から音楽の振興が重視された。このような国策から各地の鉱山や工場には勤労者による音楽隊が続々と誕生した。明治44年，職工養成所音楽部として誕生した九州の八幡製鉄所の吹奏楽団は戦後も活動を続けてきた団体として有名である。関東地方では，大正4年頃に足尾銅山の吹奏楽団が結成されたのをはじめとして，大正8年に古河の日光製鋼所の吹奏楽団，また14年には東京電気に音楽隊ができた。そして昭和時代に入った3年には日本フェルトの王子工場の吹奏楽団，さらに7年には石川島造船所にも音楽隊が組織された。

このように，各地の鉱山や工場に音楽隊が組織されたが，それらは全て純粋な吹奏楽として編成されたものばかりではなかった。つまり，吹奏楽器にギターやアコーディオン等を加えた編成もあり，また，その規模も大小様々であった。しかし，企業の生産向上やその社員家族たちの慰安のためには大きな役割を果たしたといえよう。

(4) 少年の音楽隊

少年による音楽隊は，明治の半頃から各地で組織する動きがあった。全国的に知られている

---

[16] 前川公美夫　北海道洋楽の歩み　ペリー来航から札響まで　北海道新聞社　1989年　40～43頁 参照

のは岡山孤児院の音楽隊である。この施設は，明治20年に石井十次が開設した孤児院で，ピーク時には1200人もの子どもを収容し，院の中には小学校まで設けていた。この孤児院では音楽隊をつくって日本各地で演奏会を開きながら，得た収入を孤児院の経費の一部に充てていた。この音楽隊は明治33年から40年までの間に北海道の各地で4回の演奏会を開いたが，その演奏は好評だったことが記録として残っている[17]。

他に北海道の函館で明治18年に山谷源次郎が開いた山谷孤児院がある。後に小樽や砂川に移転したが，道内数ヶ所の他に樺太や東京にも支院を設けた。この山谷孤児院でも明治36年に音楽隊を編成し，北海道から東京まで巡業して募金運動をしていた。

しかし，こうした音楽隊の活動も巡回の成績があがらず，明治44年頃には岡山といわず山谷といわず孤児院経営が悪化し始め，それとともに孤児院の少年音楽隊も表舞台から消えていった。

明治30年代は，地方の小学校でも小編成ながら楽隊が創設されはじめる。奈良県の榛原第一小学校では，明治38年3月に住民の寄付で購入した楽器で楽隊が結成されている。また同じ村の川上第一小学校にも楽隊があり，同校史誌には創設当時の模様についての寄稿文が集録されている[18]。

民間の少年音楽隊として全国的に最も知られたのは東京日本橋三越デパートの少年音楽隊である。その創設は明治42年で指導者は海軍軍楽隊出身の久松鉱太郎であった。創設当初は10名程の小編成であったが，まもなく増員して40名という大編成の音楽隊となった。

隊員の年令は12, 3歳で，揃いのユニフォーム姿での演奏はデパートの宣伝に大きな効果をあげた。その演奏技術は立派なもので，軍楽の生徒隊と合同演奏をするほどの力量を持っていた。この少年音楽隊は大正14年に解散したが，隊員の中には他の音楽分野に転身して名を馳せた者もいる[19]。

他にデパートの少年音楽隊としては，西方に名古屋の松坂屋少年音楽隊があり，その設立は明治43年で指導者は長沼泰三であった。この音楽隊も当初は10数名の少人数だったが，次第に大編成の音楽隊となって中京地区に話題を撒くような活動をした。

(5) 戦後の吹奏楽

わが国の吹奏楽は第二次世界大戦の敗北とともに大きく変容した。昭和20年8月の終戦によって軍隊の解体とともに軍楽隊が消滅したが，これに代わる新しい吹奏楽団が組織され始めた。つまり警視庁や消防庁等の吹奏楽団である。

東京警視庁音楽隊は，大戦前の昭和11年には組織されていたが，戦後は各県にも警察音楽隊

---

[17] 北海道洋楽の歩み　（前掲書）　46～49頁参照

[18] 平井啓　奈良県音楽近代史　音楽教育を中心に　関西印刷　59～60頁参照

[19] 陸軍軍楽隊史（前掲書）　126頁　浅草オペラの田谷力三は，三越デパートの少年音楽隊の出身

が順次組織され，昭和24年9月には東京消防庁にも音楽隊が組織された。

自衛隊は警察予備隊，保安隊を経て陸上と海上とに分かれたが，陸上自衛隊は昭和26年5月に東京中央音楽隊をおき，各師団にも組織した。海上自衛隊は25年11月に東京音楽隊を設け，各基地にあたる場所にも組織した。航空自衛隊の音楽隊設置は遅く，正規の音楽隊を編成したのは昭和36年2月であった。

このような中で，公教育としての学校音楽は学習指導要領による教育に改められ，音楽科には新しく器楽領域が導入された。小学校音楽における楽器編成は簡易楽器が中心であったが，中学校では吹奏楽器が教育用楽器として取り上げられることになったことから，生徒は学校備品の楽器に取り組めるようになった[20]。こうして中学校，高等学校ともに吹奏楽バンドの設置が年々増え，指導者不足に対応するために昭和30年には専門家を講師とする指導者講習会が東京藝術大学で行われるほどであった。そして昭和33年頃には全国の演奏団体が2000を超すまでになった。

このように吹奏楽バンドが急速に増える動因となったのは，学習指導要領の器楽領域のみならず昭和39年に開催された東京オリンピックであった。そして高度経済成長と相まって小学校にも本格的な吹奏楽のバンドが設置されはじめ，昭和50年代には全国各地の学校に普及した。このような状況下，楽器の教則本や合奏の指導書が多数出版されるようになるとともに，楽器メーカー，楽器店等による指導者講習会や出張指導等が子ども達の技能向上に寄与してきた。さらに演奏技術を高めたのは器楽のコンクールである。

日本で最も長い歴史をもつ器楽コンクールは全日本吹奏楽コンクールであるが，その第1回は昭和31年12月に大阪府立体育館で開催されている[21]。現在は全国の11ブロックに支部が置かれており，中学，高校，大学，職場，そして一般の五部門別に実施され，さらに各支部で選考された代表の演奏を審査する，という大規模なコンクールである。また，日本管楽合奏コンテストは，中学校の部（中学生以下の児童・生徒），高校の部（高校生以下の生徒）の二部門のコンクールで，小学生も参加できるように配慮されている。他には全日本小学校バンドフェスティバル，全日本マーチングコンテスト，全日本アンサンブルコンテスト等も毎年開催されている。

これらのコンクールが盛んになるにつれて，年々高度なテクニックを要する楽曲が採り上げられる傾向にあり，最近では子どもの演奏とは思えない程のテクニックを駆使して表現するバンドが数多く見られる。

---

[20] 昭和戦後音楽教育史（前掲書） 69～72頁参照

[21] 最新吹奏楽講座７（前書掲） 197頁参照

5. 学校における吹奏楽

(1) 部活動の意義

学校生活の中で，吹奏楽や合唱等の音楽系部活動に所属する生徒の多くは，教科としての音楽学習以上に部活動に大きな意欲を持って取り組んでいるといっても過言ではないようである。

現行の中学校学習指導要領総則には，部活動の意義等に関して次のように示されている。「生徒の自主的，自発的な参加により行われる部活動については，スポーツや文化及び科学等に親しませ，学習意欲の向上や責任感，連帯感の涵養等に資するものであり，学校教育の一環として，教育課程との関連が図られるよう留意すること。その際，地域や学校の実態に応じ，地域の人々の協力，社会教育施設や社会教育関係団体等の連携などの運営上の工夫を行うようにすること。」（総則第4－2(13)）

これらを音楽系部活動からみると次のようにとらえることができよう。

①生徒の自主的，自発的活動を通して音楽技能の習得に取り組むとともに，責任感や連帯感を養うこと。

②教科としての音楽や学校行事等の教育課程との関連を図ること。

③地域や社会教育関係等との連携を図った演奏の場を設定する工夫。

これについては，旧学習指導要領には明示されてはいなかったものの，多くの現場教師はこれらを意図しながら指導に取り組んできたと考える。

次に，これまで鹿児島県の高校教員として吹奏楽の指導に取り組んできた立場から，指導の実態について述べる。

(2) 高等学校における吹奏楽部の活動

鹿児島県高校における吹奏楽部活動は，「活動を通す中で生徒一人ひとりが充実した生活を送るとともに，人間的成長を期すこと，そして顧問の指導のもとに仲間と力を合わせ，自らのために，またチームのために訓練に勤しむこと」を目的としている。それとともに，コンクールにおける「栄誉を勝ち取ること」も学校の期待を担っている一面があることから軽んずることができない状況にある。

主に，鹿児島県内の高等学校における吹奏楽部は，次の四つの柱を目標として活動に取り組んでいる。

①「吹奏楽コンクール」，「アンサンブル・コンテスト」に出場し優秀な成績を収めること。

②他校の吹奏楽仲間との交流の場「県高校音楽祭」，「地区音楽祭」に参加し連帯感を深めること。

③学校行事としての「入学式」，「卒業式」，「体育祭」，「文化祭」，「定期演奏会」等での演奏

を通じ学校活性化の一翼を担うこと。

④地域の行事（市民文化祭，地域の祭りなど）に参加し地域社会と連携を深めること。

次にこれらの活動について概要を述べる。

①のコンクールやコンテストは，楽器編成の大小によって「高校A」,「高校B」等に分けられるが，それぞれ生徒自ら掲げる目標のもとに日々真剣に取り組んでいる。平成26年度の県吹奏楽コンクールには，77設置校の中65校の参加で，84.4%という高い参加率を示している。

②については，他校の吹奏楽部員との交流を通して，技術の向上や音楽性を養うことに大きく役立っている。また，音楽祭での合同演奏を通し音楽を愛好する仲間意識とともに，音楽づくりについての意欲向上を図ることをねらっている。今では卒業後学校の枠をこえた市民バンドがいくつも結成されるようになってきたが、その大きな要因となっている。

③の学校行事等における演奏は，年間における区切りの行事に欠かせない最も重要な活動であるといえよう。加えてスポーツ系部活の競技会出発に際しての「壮行会」など学校活性化の面からも大きな役割を果たしている。これら演奏の場を通し責任感や判断力を培い，人間的な成長が図られているといえよう。

④に関しては，学校は地域との連携のもとに成り立っていることはいうまでもないことであり，地域の期待に応える活動やそれに対して感謝されることによって，奉仕の精神や社会性が身に付いていく様子が見られる。

(3) 生徒数減少に伴うバンド編成と予算の問題

近年の少子化が続く現象は，吹奏楽としてのバンド編成にも大きく影響を及ぼしており，吹奏楽コンクール参加に際しては，どの部門に参加するか大変苦慮する状況が続いている。これについては，前項の①で述べた「高校A」や「高校B」の他に，「高校A（小）」や「複数校合同」等による参加についての検討とともに実施されている。

鹿児島県の統計による就学生徒数は，平成元年3月の中学校卒業者が28,816人をピークとして減少傾向が続き，平成21年度3月には18,250人に減少し，各部の部員の確保が困難になってきている。部として必要な活動費等，予算の上でも次のような点から運営を難しくしている。

①学校予算の減少に関して

生徒減の影響から自治体の予算削減に伴い，楽器購入費やメンテナンスの費用，更に楽譜の購入費まで減額される傾向が続いている。特に，大編成のバンドにはオーボエやファゴット等のダブル・リード楽器は欠くことができないものであるが，楽器の価格が一校の年間備品費に相当するほど高価なものもあり，教科間の予算配分のバランス上，購入の見通しが立たない状況である。

②吹奏楽活動に関する経費について

中学生時代から吹奏楽器に親しみ，高校入学後も吹奏楽に取り組む生徒の中には楽器を個人

的に所有する者もいるが，これは経済的に恵まれた一部の生徒に限られ，他のほとんどは学校備品の楽器を使用して活動している。また，消耗品代として一月当たり500円～数千円の部活動費を徴収する学校もあるが，公教育の場における活動費の徴収は好ましいとは言えない。

以上のような現象は高校に限らず，小・中学校においても同様に抱える問題であり，今後は校種を超えた活動のあり方についても検討することが教育界に求められているといえよう。すなわち，県内の義務教育から高校までにおける教育現場を総合的に見通した指導のあり方や，教員養成側も取り込んだ3者連携による教育のあり方を考える必要があるのではなかろうか。

鹿児島県高校の「吹奏楽部設置校・部員数」については，文末の資料「表１」を参照されたい。

6. 器楽教育の課題

吹奏楽による演奏は，オーケストラのような豊かな音楽表現力には及ばないもののダイナミックな表現が可能なこと，また野外における種々のイヴェントには欠かせないものとして重宝されてきた。すなわち学校行事の運動会や陸上競技会等における行進，そして応援などで醸し出される華やかな響きの表現が魅力的なことである。これが学校関係者の心を動かしてバンドの設置や楽器の整備を促してきたのであろう。既述のように，この数十年の間の吹奏楽の進展には目を見張るものがあり，コンクールやステージ演奏の場等ではプロに匹敵するほどのテクニックを駆使した音楽表現をするバンドも出現しており，今やわが国の吹奏楽は世界的な水準に達しているといえる。

しかし，このようなテクニックをもって演奏を披露できるのは主に都市部の学校であり，部活動に対する保護者の理解のもとに豊富な予算が得られ，更に優秀な指導者に恵まれた一部の学校であるといえよう。つまり，吹奏楽コンクール等で優秀な成績を挙げるような学校であるが，このような学校の日常における活動はどのようなものであろうか。指導者の熱意や意気込みは当然のこととして，部員に対する指導の実態はどのようなものであろうか，ということについては関係者の誰もが思う関心事である。もし，その活動が単なる技術を習得させるだけのスパルタ的な訓練に終始するのであれば，好ましい部活動とはいえないであろう。

吹奏楽に限らず，部活動はそれを同好とする仲間たちによる学習であることから，授業で学んだ知識や技能を活かしながら自主的・主体的な活動を通して学ぶべき内容を深く追及する喜びを味わうことが部活動の目的である。このような活動への取り組みが授業としての音楽学習に活性化をもたらすとともに，学習を通して他人との関わり方を学びながら人格を形成していくのである。つまり，教科としての音楽授業と部活動は表裏一体ともいえる関係であることを教師は常に心して指導に取り組むべきであり，その指導姿勢がその後の生徒の生き方に大きな影響を与えると考えるのである。

加えて，吹奏楽部の指導に携わる教師として乗り越えなければならない課題がある。吹奏楽部の場合，楽器が高価なことに加え維持管理のために多額な費用を要する。その予算獲得のために担当教師は苦慮することが多い。また予算を獲得してもその見返りとしての成果，つまりコンクール等で優秀な成績をあげることを期待されるという現実的な問題がある。指導者はこのような悩みを抱えながらも，日々の活動ではスパルタ的な指導に陥ってしまうということを度々耳にすることがある。

部活動は生徒達が活動そのものに取り組む喜びを味わえることを大切にすべきであろう。これについては管理運営者としての学校長の教育観やその姿勢が大きく関わってくるのであろうが，人格形成のうえで情意面の陶冶を担う音楽教育においては，子どもに活動そのものの喜びを味わわせるとともに，感性や創造性を培いながら自己実現に向かわせるような指導を心がけなければならないと考える。

7. 終わりに

本論では，吹奏楽について欧米諸国の発達を概観するとともに，わが国における黎明期から現在にいたる進展を史的に見てきた。また，鹿児島県の学校現場における吹奏楽部活動の現況についても述べた。

部活動は，教科学習と相まって生徒達の人格形成に寄与する活動であり，その指導に携わる指導者には，先に挙げた学習指導要領が示す「部活動の意義」を踏まえて取り組むことが求められる。つまり・自主性，・責任感，・連帯感等の涵養を目的として行われるものである。

吹奏楽部に所属した生徒の中には，卒業もその活動を続ける者や全く他の分野へ進む者など様々であるが，卒業後も部活動を通して培った能力を活かす人間になって欲しいと願うのである。

資料「表１」平成26年度　鹿児島県高等学校における吹奏楽部設置校及び部員数

地区名	学校数			吹奏楽部設置校数			部員数		
	公立	私立	計	公立	私立	計	公立	私立	計
鹿児島	14	9	23	13	8	21	611	271	882人
南薩	14	1	15	12	1	13	251	56	307人
北薩	9	2	11	8	1	9	168	71	239人
伊佐・姶良	10	1	11	8	1	9	247	45	292人
曽於・肝属	14	2	16	11	2	13	175	91	266人
熊毛	3	0	3	3	3	3	57	57	0人
大島	8	1	9	8	1	9	232	15	247人
合計	72	16	88	64	13	77	1,741	549	2,290人

（出典：「平成26年度鹿児島県高等学校文化連盟加盟校一覧」より）